



《 ロックの最高点とは？ / ミュージシャンが結婚したときの私たちのシラけ感 / 山田孝之の映画「凶悪」 / ピエール瀧とリリーのクズさ / 甲本ヒロトの考えるロックンロール / 生命飢餓とは / 死にたさ / / ロックって何 / 》

神聖かまってちゃんと映画「凶悪」(山田孝之) —— 生命飢餓からからうまれるけもの

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、「生命飢餓」を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

神聖かまってちゃんと映画『凶悪』(山田孝之)

生命飢餓からからうまれるけもの

「うーん、マシダム」



「うーん、マンダム」。

筋肉少女帯の大槻ケンヂが昔、観客にもとめたコールアンドレスポンスである。

自分自身の心が、生命飢餓状態におかれている場合、人間は他者を求めようとするものだ。腹の底から突き上げてくるようなLIFEに対する執着や、心臓まで凍ってしまうかと思われる死の脅威におびやかされて、いてもたってもいられない状態におかれた場合に人は奇妙なMCをする。

友人が奇妙なことをいいたときは、助けを求めているという裏メッセージが隠されていると思って間違いない。

さて、人間が生命飢餓状態におちいるのは、戦場に行くとか、↓

さて、人間が生命飢餓状態におちいるのは、戦場にくだとか、病気になるとか、お腹にガスが溜まってオナラ痛がおこるとか、自分の生存を続けていく見通しが断ち切られる場合に限る。すぐ近い未来に限られる。

それを超えて生き続ける場合は、人間はその希望の方に重点をおいている。綺麗事を並べ立てるクソヤロウたちはそんなものを盾にするので、生命飢餓感はほんかくてきにはまったくわかっていない。

それが起こってくるには、近い未来が絶望にならなければならない。

山田孝之が主演した『凶悪』（二〇一三年）という作品がある。↓

山田孝之が主演した『凶悪』（二〇一三年）という作品がある。

恐喝、窃盗、殺人、麻薬、強姦、さまざまな犯罪を犯していたピエール瀧（電気グルーヴ）扮するA（役名忘れた）は人間の尊厳をさんざん踏みにじってきた極悪人である。

それがついに逮捕されて刑務所に送られてしまうのだが、その獄のなかで彼は週刊誌に「自分には証拠隠滅した殺人がある。そのとき一緒に殺しをしたBがいる。それが捕まらないと、おれの正義感が納得できない」と手紙を送る。

山田孝之は捜査し、AとBがそれまでおこなってきたむごい犯罪の詳細を知ることになる。↓

山田孝之は捜査し、AとBがそれまでおこなってきたむごい犯罪の詳細を知ることになる。

山田はそれに戦慄するが、正義感を増幅させ、ついにリリーフランキー扮する犯人B（役名忘れた）を捕まえた。

そうすると一転、Aはなごやかなボサツのような顔になり、「わたしはキリスト教に入信しました。キリスト教最強っすね！」とそれまでの極悪な雰囲気奇妙にいったい消していた。

やがて裁判になり、Aはいままでの犯罪は反省している（減刑してほしい）、という姿勢を全面にだし始める。

つまり、Aは↓

つまり、Aは犯罪から免れているBが許せないという動機ではなく、告発によって死刑をまぬがれたいという思いからそれを行ったのである。

もしくは、Bが捕まって死刑を免れるかもしれないという、わずかな可能性がでてきた途端に意志が変わったのかもしれない。

↓

死刑を覚悟したから正義感が湧いてきたはずが、自分が生きられるかもしれないと分かると、手のひらをかえすように自分の生命に固執する人間の業がうかびあがる場面だった。↓



生命飢餓状態におちいっておこなってしまう行動は他人からみればとても奇妙な行動だ。しかし、本人にしてみれば気持ちは一貫している。「生命」という軸から自分が動いているからだ。

死ぬことが目の前にせまり↓

死ぬことが目の前にせまり、もう絶望しかないという意識が心を満たすとき、心は飢餓状態になる。そして、生命に対する執着、死に対する恐怖がすさまじく自分を突き動かす。

こうして考えると、生命活動は先の未来に対する絶望がないと湧き上がってこないことがわかってくる。

突き動かされているロックミュージシャンは数少ない。↓

突き動かされているロックミュージシャンは数少ない。というか、ミュージシャンが歳をとって結婚しだすと、なんだか曲がつまらなくなる。

これは不思議だ。リスナーとしては不満である。そして、その思いにさまざまなミュージシャンが返答しているが、その答えはたいてい「守るべきものがみつかった。もっと強くなった。がんばれる」というものだ。

リスナーからしてみれば「うーん？」とってしまう。

守るべきものっておれたちリスナーじゃなかったのかい？ ↓

リスナーからしてみれば「うーん？」とってしまう。守るべきものってわたしたちリスナーじゃなかったのかい？という小さな違和感だ。わたしたちの他にちゃっかり守るべき者をもってんじゃないよ！という、ラーメン屋の店主に扮した泉ピン子ばりの勢いでいいたくなってしまうのだ。

生命飢餓感から人間は↓

生命飢餓感から人間は狂って（あえてこの表現）ロックバンドで音を鳴らし始める。他者を求めようとする。

それに呼応するように↓



それに呼応するように、他者を求めるリスナーが近寄ってくる。

どちらも生命飢餓感にあふれているのだ。

なのにミュージシャンが結婚してしまい、守るべき他者を見つけてしまうとそれが失われてしまう。なぜなら他者は求める姿勢はかわっていなくてもある他者を得てしまっているからだ。

0と1は天と地の差である。

例えば、甲本ヒロトは↓

0は生命飢餓が発動する。

突き動かされているという言葉がふさわしいほどエネルギーに満ち溢れている0は最強だ。

例えば、甲本ヒロトは中学時代にほうきをギター代わりに持ったときがロックンロールの最高点とっている。その後、大人の音楽的行為はそれを越えられない、でもそのときの気持ちに近づこうとするのがプロ、ぼくらはそれを目指してるともっていた。

の子（神聖かまってちゃん）は少年のようだ。↓

の子（神聖かまってちゃん）は少年のようだ。わーわーぎゃーぎゃー叫ぶ姿は中学生みたいである。

甲本ヒロトのいうように、中学のとき学校のそうじの時間にほうきをギターに似せて弾きまくることがロックンロールの最高点なら、の子の姿はまさにそれだ。ほうきをギターに似せて弾きまくるあの無敵感をリスナーは知らず知らずのうちにの子に重ねているのではないか。

あの全能感の子は感じさせてくれる。上手いとか下手とか言いたがりのクソみたいな評論家きどりの人間が忘れていて、リビドー全開の人間のそれが神聖かまってちゃんにはある。

の子の初期作品といま↓

とはいえ、の子の初期作品といまとを比べるとやはり生命飢餓感が薄れた。

どうしようもなく突き動かされていた初期の楽曲は鬼気迫るものがある。情念のようなものがこもっているのだ。



詩人の萩原朔太郎は↓

初期と比べて今が劣っているかといえばそうではない。というか、上とか下とかないのである、表現においては。好きか嫌いかだろう。詩人の萩原朔太郎は例えばこういつている。「今日の自分が昨日の自分を超越るなんてありえない。人間は成長しない。人間がするのはただ【変化】だ」という内容の記述を残している。



大人に対して↓

大人に対してつくられるロックほどつまらないものはないと思うが、自分を投影して作られるロックはとても素晴らしいと思う。

の子は変わった。変わったけど、きちんと自分を投影した曲を作っている。その誠実さはだれでも出来ることではない。ヒット曲を作ろうと思えば「愛してる」もしくは「おまえだけ」と入れればいいのだから、スーパー簡単である（現代ではその手法は通用しにくいとは思うが）。かといって、ロックバンドにありがちな自問自答を勝手にくりかえすサービス精神のない楽曲ではなく、リスナーがとっつきやすいキャッチーさのある楽曲になっている。

神聖かまってちゃんの曲を通して、リスナーは↓

神聖かまってちゃんの曲を通して、リスナーはの子のしている景色を覗いている。ロックスターの生き様はリスナーの指針としてはたらくものだ。

同じく、神聖かまってちゃんのリスナーはの子の生き様を見て、それを指針にしている。

絶望↓

の子の変化はリスナーにとって悲しいものばかりではない。むしろ、最高に楽しみである。

の子のような生命飢餓感にあふれた、未来に絶望しかなかった人間がどう変化していくのか、もしもロマンを追い求めているの子がある何かを獲得するなら、その姿はリスナーにとって確かな希望になるからだ。

こんなに夢をかけられるバンドもそうそういない。

どう転がろうが彼らの行く先は予測不能。彼らの船に乗るならはやく乗ろう。ぐだぐだしながらいこうぜ。

←

うおお

神聖かまってちゃんと映画「悪人」（山田孝之）——生命飢餓からからうま
れるけもの

<http://p.booklog.jp/book/87055>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ